

サトウサンペイ氏とフジ三太郎：特別展「サトウサンペイの世界—四コマで切り取る昭和—」の予告として

今回は美術工芸資料館収蔵品紹介は休載とし、本学OBであるサトウサンペイ氏の特別展（5月26日オープン）のご案内を、並木誠士美術工芸資料館長に執筆いただきました。

ある年齢以上の方は、朝日新聞の四コマ漫画と言えば、長谷川町子の「サザエさん」とサトウサンペイの「フジ三太郎」という印象をお持ちなのではないでしょうか。

昭和時代の前半の典型的な家族である磯野家を舞台とした「サザエさん」に対して、「フジ三太郎」は、それよりも一世代若いフジ家が舞台となっている。「サザエさん」は、まさにそのタイトルからもわかるように、サザエさんという女性を中心にしてみた家庭や家族のあり方が題材となっているが、一方の「フジ三太郎」は、万年ヒラのサラリーマンであるフジ三太郎の、会社と家庭での「活躍」が主題になっている。「サザエさん」にもマスオさんの会社での様子が描かれるが、それは決して中心のテーマではない。それに対して、「フジ三太郎」では、サラリーマンの目で社会を見ようという新しい視野がひろがっている。このような視点を、四コマ漫画の新しいあり方として、すこし遅れた世代の私など毎朝楽しんだ記憶がある。

その「フジ三太郎」の作者であるサトウサンペイ氏が本学の出身であることを知っている人はあまり多くないかもしれない。サトウ氏は、1928年名古屋のお生まれで、大阪育ち。旧制生野中学校（現在の大阪府立生野高等学校）を卒業後、京都工芸繊維大学の前身である京都工業専門学校に入学された。京都工業専門学校では、色染科で学ばれた。卒業後、大丸（現在の丸の内百貨店）に入社され、同社の宣伝部に勤めながら四コマ漫画を手がけられるようになり、1957年から大阪新聞に「大阪の息子」の連載をはじめ、漫画家としてのデビューを果たした。朝日新聞の「フジ三太郎」は、1965年4月1日から連載をはじめ、当

初は夕刊で、1979年からは「サザエさん」の跡を継いで朝刊へと場を移した。連載は、途中のわずかな中断があるものの1991年9月30日まで26年と半年のあいだ続き、その数は8168回に及んでいる。「フジ三太郎」のほか、「夕日くん」「アサカゼ君」などが代表作として知られており、1966年に文藝春秋漫画賞受賞。1991年には都民栄誉賞、1997年には紫綬褒章を受章されている。現在84歳、きわめてお元気である。



サトウサンペイ氏 近影



自画像としてのフジ三太郎

美術工芸資料館では、2009年、2012年と教員作品展を開催しており、また、浅井忠や鶴巻鶴一をはじめとして本学に関係のある作家達に焦点をあてた展覧会を定期的で開催したいと考えて活動を続けている。そのような方針の一環として、OBであるサトウサンペイ氏の展覧会が開催できないかと考え、2013年秋にサトウ氏に手紙を出し、年末に東京でお目にかかることができました。京橋の喫茶店での打ち合わせは、終始笑いの絶えないものであり、そのなかで、今回の企画を快諾していただき、現在、5月26日オープンの展覧会の準備を進めている（会期は8月9日までの予定）。2月17日18日には、ご自宅や倉庫に保管されている作品や関係資料類を調査させていただき、展示の構成を考えることができました。

ここで、展覧会の予告を兼ねて、「フジ三太郎」についての私感を簡単に綴ってみたい。

「フジ三太郎」をあらためて通読すると、いくつかの特徴を読み取ることができる。「フジ三太郎」についてつねに語られる「サラリーマンの悲哀」や茶目っ気、お色気などももちろんだが、ここでは、ふたつの側面に注目してみたい。

まず第一に、風俗や流行、事件やその背後の社会風潮や

政治的な動向など、時代の動きへの敏感な反応である。これは、今回の展覧会のサブタイトルを「四コマで切り取る昭和」とつけた由縁でもある。そして、時代の動きというのは、さまざまに政治的である場合も多いが、そこで発揮されるのは、一貫して権力の横暴に対する反骨であり、弱いものへの優しい眼差しである。

高度経済成長期で、まさに車が増え、排気ガスで空気が汚れる。大企業は公害を生み出し、また、政界との癒着が報道される。そんな状況を、道路を歩く人や小さな子どもの目線で、そして、大企業のトップに対する「ヒラクラス」（ヒラのサラリーマンのことだ）の目線で鋭く風刺する。風刺の矢をストレートに放つ場合もあれば、お得意のお色気や茶目っ気で混ぜ返す場合もある。いずれにしても、つねに庶民の感覚を保ちながら、硬軟両方の刃で力の横暴に立ち向かう姿勢が、26年半という長期にわたり新聞の顔であった理由であろう。

第二点は、サトウ氏のものづくりへの並々ならぬ関心である。「フジ三太郎」を見てゆくと、生活のなかのちょっとした工夫や発明が数多く登場する。なかには、10年20年後に実際に製品化されているようなものもある。発明ものといえば、「どこでもドア」に代表される「ドラえもん」が有名だが、ストーリー漫画である「ドラえもん」が物語の展開で発明を語るのに対して、「フジ三太郎」の場合は、四コマでその発明を示さなければならないという点で、より難しかったのではないと思う。なにしろ、四コマのなかで、その発明品が

必要となる状況を説明し、さらに、「オチ」としてその発明品が有効に機能するかを示す必要があるからである。

そして、このようなサトウ氏の「ちょっとした工夫や発明」をつぎつぎに繰り出す姿勢の原点に松ヶ崎時代の経験が活かされているといえ、大げさだろうか。

サトウ氏は、じつは四コマ漫画家として活躍される一方で、パソコンの入門書を著しているのである。サトウ氏の『パソコンの「パ」の字から』（朝日新聞社）は、ウィンドウズ98対応版（2000年）、ウィンドウズXP対応版（2002年）と刊行され、パソコン初心者の戸惑いをおもしろおかしく綴りながら、入門書としての役割も果たしている。また、サトウ氏は、79歳からブログを始め、83歳でみずからの漫画を電子書籍にするという、メカ好き、新しもの好きでもある。この様子は2013年にNHKのニュースで取りあげられたので、ご覧になった方も多いのではないだろうか。このようにサトウ氏は、ものづくりに対して並々ならぬ関心を示している。そして、それは、サトウ氏が松ヶ崎で培った若き日の感性をいつまでも持ち続けていることを示しているのかもしれない。

展覧会では、昭和という時代をサトウサンペイ氏の視点で、つまりフジ三太郎の視点で捉え直してみたい。また、サトウ氏が松ヶ崎で学んだ時代の思い出も、今回の展覧会のために書き下ろしていただくことも考えている。

（美術工芸資料館 並木誠士）



ノートにはさまざまなアイデアがあふれている

